
異説：学而時習之、不亦説乎

アクリル事業部UFO開発研究所・研究所長
木村 次雄

昨年は「声に出して読みたい日本語」を始めとして日本語の美しさ素晴らしさ、そのリズムの持つ楽しさを解説した本が数多く出版され、一種の日本語ブームを生み出した。

振り返ってみると、私が小・中・高校生の頃は小説の書き出し・詩・漢詩の全文を丸暗記することが強制されクラスで一人ずつ暗唱させられた。暗記の苦手な私には相当の苦痛を伴ったが、今になっても折に触れそうした文章のいくつかが自然と口を伝って流れ出す、そして、それが自分の人生に彩りを添えてくれ有難く思うことが多い。そんな文章の一つに論語の一節「子曰わく、学びて時に之れを習う、亦説ばしからず乎。朋有り遠方より来る、亦た楽しからず乎。」がある。

研究開発の第一歩もこの「学ぶ」と言うことにあるのではないか？。何故このような現象が起こるのか、我々は関心(興味)を持つ、そしてそれを知る(解決する)ために先ず学ぶ、学ぶことは容易くはない、最初は先人の学んだものを忠実に勉強するが、行つ戻りつ遅々として進まない、時には物理学や数学まで遡って学ばなければならない、悪戦苦闘し、やっとなるほどそうかと納得出来る段階に達する。「習う」とは学んだものを自分が直面している様々な問題に応用し見事に解決に至ることを示す。まさに「説ばしからず乎」と言う状況に至るわけである。

何時でも学んだことをそのまま実際の問題に応用しただけで解決出来るわけではない「定説」ではどうしても説明出来ない様々な現象に遭遇する。ここで初めて定説を疑ってみる、そして新たな「理論や解決法」を考案する。こうした一連の動きは「北辰一刀流」の極意「守破離」にも例えられると言う。「守(シュ)」とは定説をひたすら勉強し基本を理解し自家菜籠中のものにする。こと。「破(ハ)」とは、そのうち定説では説明のつかない妙な現象にぶつかり、結果として定説を疑い新たな道を模索する、そして、「離(リ)」とは定説から離れ新たな道(理論)を構築し歩む、すなわち創造の域に達することを意味すると言う。

俗人が「破・離」の境地にまで達するのは至難の技であろうが、我々が日々、研究開発を進めるにあたって少なくとも「学びて時にこれを習う」と言うことは実践したい。それでも成功に導くことは容易ではない。最後は「お客様は私を信頼して仕事を与えて下さいました、一日も早く解決したいのです、なにとぞ我に知恵と力を与えたまえ」と神にも仏にも祈る、そうすると不思議と解決に至ることを何度か経験した。そして「君に仕事をまかせて本当に良かった、今夜はお礼にご馳走しよう」とか「今度、うちで新しいことをやろうと思っている、君のところで一つやってくれないか」とも言われる。

まさに、お客様のほうから自分のほうにやって来る、両者の関係は頼むものと頼まれるものを超え「朋有り遠方より来る、亦た楽しからず乎」の境地に達するのである。

周囲を見回してみると、社内・社外を問わず研究開発に成功する人・失敗する人は単なる「運・不運」、や「知能や学歴の有無」さらには「努力の多少」を超えているように見える。大きな成功を収める人と何時も失敗する人に明暗が分かれるように思われることは、結局のところ「学ぶ」ことの差にあるのではないか。安直に目前の問題の解決に直接つながるような本(ハウツー物)を読んだり書物の表面をなぞっているだけでは物事の本質的な理解と問題解決には至らない。「習之」たり「朋が遠方より来る」説ばしさや楽しさを思い「学」ことの苦しさを乗り越えたい。